台大日本語文研究第 22 期
2011 年 12 月，頁 205-228
2011-10-30 收稿，2011-11-26 通過刊登

漢語系接尾詞「的」之一研究
—與外來語詞根結合之派生詞為主—

林慧君*

摘要

截至目前爲止，有關漢語接尾詞「的」之研究大多主要是探討[漢語+的]型態（如「伝統的」等）的派生詞，然而近來如「カリスマ的」之類的「的」與外來語所結合之派生詞語例也不少。因此，本篇論文主要以這些新生的[外來語＋的]型態的派生詞爲研究對象，藉由比較對照傳統固有的[漢語＋的]派生詞，探討分析[外來語＋的]型態的派生詞其語意用法及構詞方面的特徵。

透過本篇論文的分析，了解到[外來語+的]型態的派生詞與傳統的[漢語+的]派生詞相同，主要是集中於[属性限定用法]以及[比喩用法]，然而也確認了所謂的新用法－[属性評価用法]確實逐漸成爲一般用法的趨勢。而關於外來語詞根的構詞性質，本篇論文從品詞、語意範疇及語意的評價性等三個觀點來分析，了解到：[外來語+的]派生詞與傳統的[漢語+的]派生詞不同，其外來語詞根乃屬於固有名詞、具體概念之詞居多；而這種性質的外來語詞根在與接尾詞「的」結合時，會經過抽象化・概念化的過程，使得語意內容模糊曖昧化，以修飾・限定、比喻、評價後接的名詞。而此一[外來語+的]派生詞之特徵，其背後是因爲現代日人在與人溝通時經常採取委婉說法的態度（euphemism）所致。

關鍵詞：接尾詞、詞根、外來語、派生詞、委婉說法

* 台灣大學日本語文學系副教授

An analysis of Kango suffix「TEKI」 —mainly about the derivatives combining with loanword base—

Lin, Huei-chun*

Abstract

So far, examinations of kango suffix "TEKI" have been mostly about "Kango+TEKI",such as "DENTOU TEKI".However, the examples of "TEKI" combining with loanword such as "KARISUMA TEKI" are getting more recently. In this article, the "Loanword+TEKI" derivatives which is considered newly than the "Kango+TEKI" derivatives will be discussed; further, the characters of its semantic usages and word formation will be illuminated by comparing with the "Kango+TEKI" derivatives.

By this article, the "Loanword+TEKI" derivatives are the same as the "Kango+TEKI" derivatives for they are mostly the attribute limited usages and metaphorical usages. However, it can be identified that the so-called new usage, attribute limited usage ,is getting more and more common in general usages. In addition, the word formation of loanword base is analyzed by three viewpoints: part of speech, semantic category, and the evaluation of meaning. Then, we found that "Loanword+TEKI" is different to the traditional "Kango+TEKI", and the loanword base which shows a proper noun or a concrete idea is more. Further, when the loanword base combines with "TEKI", it goes through a process of abstraction, summarization, and makes the meaning vague, ambiguous to give it a similitude, modify, restrict and evaluate the follow-up word.

* Associate Professor of the Department of Japanese Language and Literature, National Taiwan University

Behind the characters of loanword base derivatives lies the euphemism, which is a way that modern Japanese take when communicating with others.

Keywords: suffix, base, loanword, derivative, euphemism

漢語系接尾辞「的」についての一考察
—外来語語基との結合を中心に—

林慧君*

要旨

漢語系接尾辞「的」に関する研究は今までは「伝統的」といった [漢語＋的]構造の派生語を中心に行われてきたのが多かったが、最近、「的」は、例えば「カリスマ的」などのように、外来語などとも盛んに結合するようになった。本稿では、より新しいと思われる、[外来語＋的]構造の派生語を取り上げ、従来の[漢語＋的]派生語と比較しながら、その意味用法上、語構成上などの特徴を解明する。

本稿の考察を通して、[外来語＋的]派生語は従来の[漢語＋的]と同じく、主に[属性限定用法]と[比喩用法]に集中しているが、いわゆる新用法の[属性評価用法]も確かに定着しつつある傾向が確認できた。それから、外来語語基の語構成的な性質に関しては、品詞性と意味分野、語彙的意味の評価性という三つの観点から分析すると、従来の[漢語＋的]派生語と違って、固有名詞と具体的な概念やものを表す語が多いということがわかった。そして、そのような外来語語基は、「的」と結合するに当たり、抽象化・概略化というプロセスを経て、表現内容をぼやかしたりあいまい化したりしながら、後続語を比喩、または修飾・限定、評価するようになるわけだ、と明らかにできた。この [外来語＋的]派生語の特徴の背後に、現代日本人のユーフェミズム志向のコミュニケーションのし方が働いていると考えられよう。

キーワード：接尾辞、語基、外来語、派生語、ユーフェミズム

* 台湾大学日本語文学科副教授

漢語系接尾辞「的」についての一考察
―外来語語基との結合を中心に―

林慧君

一、はじめに

日本語の「的」という漢語系接尾辞は、元来中国語から借用され[1]、その後日本語として独自の意味用法が展開してきたものである。今まではこの接尾辞「的」に関する研究は、「国際的」「自主的」などのような漢語語基と結合する派生語を中心になされて来たのが殆どであった。

ところが、近年日本語は外来語の大量使用が目立つようになり、現代日本人の言語生活は外来語を抜きにしては営めないぐらいというのが現状であり、この造語力の高い接尾辞「的」も、漢語語基との結合に止まらず、例えば「カリスマ的」「反イスラム的」などのように、外来語や混種語などと結合するなどと、より活発な造語様相を見せている。故に、「的」を含む派生語の新しい研究が要求されていると言えよう。従って、本稿では外来語語基と「的」が結び付く派生語を取り上げ、従来の[漢語＋的]派生語と比較しながら、より新しいと思われる[外来語+的]という語構造をもつ派生語の語構成また意味用法などの特徴を明らかにしたい。

二、先行研究、考察方法及び目的

漢語系接尾辞「的」についての従来の研究は、その前接する語基、そして「的」を含む派生語の意味用法、と大きく二つの内容に分けられる。

まず、「的」の前接する外来語語基に関する研究は主に、遠藤（1984）、

[1] 原（1986）によると、江戸末期頃に、中国の俗語文学の影響（例えば「泥的」（泥棒））があったり、『英華字典』の訳語を通して中国語の影響を受けたりしたと推測される、と言う。

山下（1999）と王（2000）が挙げられるが、遠藤（1984）には、漢語語基との結合と同じく、「的」は抽象的な意味の外来語語基と結合していると述べられている[2]。ところが、山下（1999）には、「的」の前接する語基の意味分野の分布からして、漢語語基とその他の和語・外来語・混種語語基との間に違いが見られ、漢語語基には「抽象的関係」が多いのに対し、その他の語基にはより具体的な概念や指示物を表す語が来る傾向があると言う[3]。そして、王（2000）も、「的」と結び付くことが許される外来語は、実体概念を表す名詞に限られると論述されている[4]。要するに、これらの、「的」に前接する外来語語基に関する記述に食い違いがあるわけである。従って[外来語＋的]派生語の実証的な語例調査を通し、改めて検討し直す必要があるように思われる。

次に、「的」を含む派生語の意味用法の先行研究には、前掲した三つの論考の他に金澤（2005）も挙げられる。

接尾辞「的」を含む派生語全体の意味用法は、従来用法（本稿では「従来用法」と呼ぶことにする。以下も同様。）及びいわゆる新用法と二つに大きく分けられるが、従来用法とは、例えば、「ビジネス的な付き合い」のような[属性限定用法]、「パイプ的な役割」のような[比喩用法]、また「音楽的教養」（「音楽に関する教養」）のような[関連付け用法]が含まれるが、一方、いわゆる新用法とは、「スケジュール的に厳しいが」などのような[属性評価用法]と、「わたし的に言いますと、…」といった[主体用法]をさす。前述した、遠藤（1984）、山下（1999）と王（2000）は、従来の用法のみを分析するのに対し、金澤（2005）は主に新用法を論じたものである。つまり、先行研究は大体それぞれについて分析しているだけに止まり、従来用法と新用法を総合的に論じるものは見当たらない。それに、外来語語基と「的」が結合する派生語が従来用法か新用法か、即ち如何なる意味

[2] 遠藤（1984）130 頁。
[3] 山下（1999）32 頁。
[4] 王（2000）55 頁。

用法をもつのかという問題については今までは殆ど言及されていない。

というわけで、本稿では接尾辞「的」と外来語語基が結合する派生語のみを考察の対象とする。具体的には、『朝日新聞記事データベース 2001』より 1 月から 12 月までの 1 年分の [外来語＋的]派生語を拾い上げることにした。前接する外来語語基の異なり語数は 252 例、文における[外来語＋的]派生語の異なり語数は 481 例収集した。

本稿では、まず、「的」を含む派生語の、従来用法及び新用法を再び検討し直した上に、採取した[外来語＋的]派生語の実例の意味用法を調べ、それらは従来の[漢語+的]派生語と何か異同があるかどうかを明らかにする。なお、「～的」派生語の諸意味用法間で何かの関連性はないのかといったことも、従来の研究ではあまり言及されていないため、この問題も併せて論述したい。

次に、接尾辞「的」に前接する外来語語基に関して、品詞性、意味分野、語彙的意味の評価性という三つの観点からその語構成的な性質について考察を行う。

そして、「的」の前接する外来語語基の語構成的な性質及び、「的」を含む派生語全体の意味用法が如何なる関わりを有するのかということをも、本稿の分析の視野に入れ論じてみたい。

本稿は上記した研究方法に基づき、「的」に関する先行論究を踏まえ、従来の[漢語＋的]派生語と比較しながら、 [外来語＋的]派生語の語構成上、意味用法上などの特徴を解明しようとするものである。

三、「～的」派生語の意味用法

本節では、「的」を含む派生語（以下「～的」派生語と略す）の、従来用法及び新用法に関して、先行研究の論点の整理を通して、[外来語＋的]派生語の意味用法の検討を含めながら、まとめ直して論じる。

「～的」派生語の用法をまとめると、次の五つにまとめられる。（a）（b）（c）は従来用法であるが、（d）（e）がいわゆる新用法であ

る。

以下、順に追って説明していく。

（a）[属性限定用法]

（b）[比喩用法]

（c）[関連付け用法]

（d）[属性評価用法]

（e）[主体用法]

まず、従来用法の（a）（b）（c）について論述しよう。

（a）[属性限定用法]

例えば、「外交的な攻勢」「エコロジー的視点」「意図的に高める」「トップダウン的に決定する」などである。これは、「的」の前接する語基が「的」の後続する語（名詞または動詞）を限定修飾する意味用法である。つまり、「的」の後続語には様々な性質が含まれているが、「的」の前接語基がそのうちの一つの属性を取り上げ、後続語を限定、修飾するのである。この用法は「～的」派生語の最もポピュラーな用法であり、今回の[外来語＋的]派生語の調査でも 481 例のうち、211 例（44%）をピックアップでき、実例の最も多く、言わば、「～的」派生語のプロトタイプ的な用法だと言えよう。

この[属性限定用法]の「～的」派生語が文で果たす機能は多様であり、前に挙げた例のような、連体修飾や連用修飾はもちろん、「…が一般的だ。」「…イタリア的ではないが、」などの如く述語として働くこともある。

（b）[比喩用法]

例えば、「教祖的存在」「指導的な灯台」「リーダー的な役割」「サロン的な場所」などである。この用法の例は、大体「～的（な）～」を「～のような～」とパラフレーズすることができる。例えば、

> 五条坂にあった河合邸は学者や作家、新聞記者や外国人までが出入りし知的な会話を楽しむサロン的な場所だった。（朝日新聞 2001.10.11）

の中の「サロン的な場所」は「サロンのような場所」と言い換えら

れるように、「的」の前接語基（「サロン」）は、被修飾の対象（「河合邸」）とはイコールな関係ではなく、あくまでも被修飾を喩える基準だけなのである。

この用法は、今回の「～的」派生語の実例調査には数が少なくなく、167 例（35%）をピックアップできた。前述した[属性限定用法]に次いで 2 番目に多い用法なのである[5]。なお、この[比喩用法]の用例は文において殆ど連体修飾として働くのが特徴的である。

今回の調査分析では、（a）[属性限定用法]と（b）[比喩用法]の間に関連性があると思われる例が観察された。

例えば、「カリスマ的存在」「カリスマ的ピアニスト」「カリスマ的な指導者」などの例は、「的」の後続名詞がその前接外来語語基「カリスマ」そのものではないが、ただ、「カリスマのようなN」という比喩として表現されたものである。「カリスマ的（な）N」という比喩用法をもつ用例は今回の調査では 14 例もあり、「カリスマ」という外来語は「～的」派生語の[比喩用法]の前接語基としてよく用いられることがわかった。比喩の基準としてよく使われるに従い、比喩の基準も物事の属性のようなものとして捉えられるようになると思われる。例えば、「カリスマ的指導者」という例は、本来、大衆を魅了するという「カリスマ」のような「指導者」を喩える表現であったが、広く使用されることにより、「カリスマ」も「指導者」の属性の一つとして把握されるようになり、そして、全体としては[属性限定用法]に転じたと捉えられてもよかろう。

他に、「カリスマ的な雰囲気」「エンタテインメント的な手法」「ゲリラ的取材」「マニア的な話」「ショー的訓練」なども[比喩用法]から[属性限定用法]に転じた用例だと見られよう[6]。

---

[5] 山下（1999）35 頁にも、外来語と「的」が結合した派生語にはこの[比喩用法]の用例が多く見られる、と述べられている。今回の調査結果もその記述と一致している。では、なぜ[外来語＋的]派生語は　[比喩用法]の例が目立って多いのかが問題になる。これに関しては第 5 節で後述する。

[6] この、[比喩用法]と[属性限定用法]との関連性は従来の研究では触れられていない。

（c）[関連付け用法][7]

この用法の例として、例えば「音楽的教養」「生理学的研究」「リゾート的な利用」「モデル的に実施したい」などが挙げられる。これらの例は、「的」の前接語基とその後続語が文脈によって様々な複合辞のような関連付けで結び付くと考えられる。例えば、前出の例も、次のようにパラフレーズすることができる。

「音楽的教養」→「音楽に関する教養」

「生理学的研究」→「生理学における研究」[8]

「リゾート的な利用」→「リゾートとしての利用」

「モデル的に実施したい」→「モデルとして実施したい」

今回の「～的」派生語の調査ではこの用法の用例はさほど多くなく、この点から考えるに、それほど生産的ではないようである。

なお、この[関連付け用法]は文での働きとして、上に挙げたとおり、連体修飾も連用修飾の機能も果たすことができる。

以上は従来の用法であるが、次は、いわゆる新用法の（d）[属性評価用法]及び（e）[主体用法]について検討しよう。

金澤（2005）は「的」の新用法についての論考であるが、「的」の新しい用法について詳しく論じるのみならず、その新用法の文における文法的・意味的な特徴も指摘されている。が、[外来語＋的]派生語にこの新しい用法があるかどうかに関しては論及されていない。

（d）[属性評価用法][9]

例えば、

「全国的に珍しい民間企業の一つである」

「形式的には違反かもしれないが」

「システム的に統一される」

「スコア的には満点です」

---

[7] この用語は王（2005）を参考にしたものである。

[8] 「音楽的教養」「生理学的研究」という[漢語＋的]の 2 例は山下（1999：35）から引用した例。

[9] 金澤（2005）では「属性用法」と名づけられたが、本稿ではまず前述の（a）の[属性限定用法]と区別するために、またこの用法の、「評価」という意味的な特徴を表すために、[属性評価用法]と呼ぶことにした。

などである。これらの「～的」派生語は大体「～として（は）……」（「全国として（は）」「形式として（は）」「システムとして（は）」「スコアとして（は）」）と言い換えられる如く、主語（話し手）が「的」の前接語基の表す属性面に関して評価を下すのである。金澤（2005）では、この[属性評価用法]の「～的」派生語は、文においてまず「～的には……」という連用修飾の形で文頭に現れるのが自然であり、そして「～的」派生語の後に来る述語にはその属性面に関する主観的な評価内容が来ることが多い、と指摘されている。これは断定を避ける婉曲な表現であり、識者の間では評判が悪いと言う。

この新しい（d）[属性評価用法]は、前の従来からの（c）[関連付け用法]と連続的だと考えられる。次の例を見られたい。

① 「イメージ的な損失は大きい」

② 「イメージ的には似ている…」

①は、様々な損失の中で「イメージ」という属性面を取り上げ、限定・修飾するだけの表現である。一方、②は、主語（話し手）が種々の属性面の中から「イメージ」という属性を取り上げ、限定した上に、その属性に関する主語の主観的な考え・評価を、「～的」派生語の後に付け加えるわけである。両者は、属性を限定するという点では共通してつながっているが、（c）[関連付け用法]は主に後続する名詞に対して連体修飾機能を果たすのに対し、（d）[属性評価用法]は主に後続する文に対して連用修飾機能を果たす、という点においては両者の違いが見られるのである。言わば、新用法（d）は、従来用法（c）から更に発展した用法だと言えよう。

今回の[外来語＋的]派生語の調査でも、この用法に属すると判断される用例は 49 例見付かり、全体の 10%を占めている。前述の（a）（b）用法よりは少ないものの、[漢語+的]派生語より増えている。既に前述したが、この「～的」の[属性評価用法]は断定を避ける婉曲的な表現効果を有しており、日本人のユーフェミズム志向のコミ

ュニケーションのし方[10]からして、この新しい用法は新生の[外来語＋的]派生語でも伸びつつあり、生産性をもつと考えられよう。

（e）[主体用法]

例えば、

「わたし的に言いますと、…」

「個人的には何の感興もわきません」

といった例のように、この用法は、接尾辞「的」の前接語基が限られており、一人称の主体を表す名詞、代名詞が殆どであり、「～的」派生語の後に一人称主体の立場や見方を表明する文が続くことが特徴的である。文での形態としては、大体文頭に来て連用修飾的な機能を果たすのが多い。

ところが、本稿の[外来語＋的]派生語の実例調査では、この新用法の用例は見付からなかった。日本語の一人称を表す表現は和語と漢語のみに止まる故、当然の結果であろう。

以上、本節では、今回調査した[外来語＋的]派生語の意味用法を考察しながら、「～的」派生語の、従来用法及び新用法に関して検討し直してきた。ここで、今回調査した [外来語＋的]派生語の意味用法に関する結果を次の表 1 に示す。

表 1　[外来語＋的]派生語の意味用法

意味用法	属性限定用法	比喩用法	比喩→属性限定	関連付け	属性評価	主体用法	合計
語数(%)	211(44%)	167(35%)	40(8%)	14(3%)	49(10%)	0	481(100%)

表 1 から分かる如く、[外来語＋的]派生語の意味用法は、[漢語＋的]派生語と同じく、[属性限定用法]と[比喩用法]に集中している。しかし、従来の[漢語＋的]派生語と異なる点として、まずいわゆる新用法の[主体用法]がないというのが挙げられる。また、新用法と

[10] 日本人のユーフェミズム（euphemism）志向とは、「物事をはっきりと言わないでその意味を文脈にまかせ解釈は受け手の推察に期待するコミュニケーション志向」のことである。陣内（2003）15 頁を参照されたい。

される[属性評価用法]が新生の[外来語＋的]派生語で無視できない程の割合を占めており、「～的」派生語の用法として定着しつつあることも、明らかにできた[11]。

なお、本節では[比喩用法]と[属性限定用法]の関連性、及び[属性評価用法] と[関連付け用法]との連続性なども分析できた。

次節では、(e) [主体用法]を除いた[12] (a) ～ (d) の諸用法を軸にし、「的」の前接する外来語語基の語構成的な性質を論じていきたい。

四、「的」の前接する外来語語基について

本節では接尾辞「的」の前に来る外来語語基について、品詞性・意味分野・意味の評価性という三つの観点から、その語構成的な性質を考察する。

(一) 品詞性から

漢語系接尾辞「的」には「国民的な関心」「アイドル的な人気」などのように主に名詞に付き、名詞を形容動詞化する機能がある。更に、形容動詞化した「的」を含む派生語が、「根本的に変わる」や「レギュラー的に出演する」といった例の如く、文の中で連用修飾機能を果たすこともできる。従って、本稿において「的」の前接外来語語基も、前接する漢語語基の場合と同じく名詞性のものが多いかどうかを調べることにした。

本稿の外来語に付く「的」の派生語実例についてその外来語語基の品詞性の調査結果を示すと、次の表 2 である。

---

[11] 外来語語基と「的」が結合した派生語は[漢語語基＋的]派生語と同じく、その意味用法が必ずしも一つとは限らない。例えば、「テレビ的」の場合、「テレビ的なもの」は[比喩用法]、「テレビ的に表現する」は[属性限定用法]、そして「テレビ的には質が落ちても...」は[属性評価用法]といった如く、[外来語＋的]派生語もその後続語や文における振る舞いなどにより、意味用法が変わったりすることがある。

[12] 前述した如く、この用法の前接語基は一人称を表す名詞、代名詞が殆どであるが故、これ以上その前接語基を論じる必要がないわけである。

表 2　「的」の前接外来語語基の品詞性

品詞	固有名詞	名詞	動名詞	名詞・形容詞	形容詞	接辞的	合計
語数(%)	42(17%)	193(77%)	6(2%)	6(2%)	4(2%)	1	252(100%)

表 2 から明らかなように、「的」の前接する外来語語基も従来の漢語語基と同じく、やはり名詞が最も多いという結果になった。これは、日本語において外国語を借用する際に、ひとまず名詞として取り入れて使用するのが多いということ[13]と関係する以外に、上述した、名詞を形容動詞化する接尾辞「的」の本来の文法機能からしても当然なことであろう。

ただ、表 2 からは、従来の漢語語基と違って、前接外来語語基には固有名詞が 17%もあるということが見受けられた。これは、固有名詞の例が 0.9%にすぎない[14]という山下(1999)の調査に比べると、かなり特徴的だと言えよう。実例を挙げると、例えば「アメリカ的」「アジア的」「ウルトラマン的」「キリスト的」などがある。なぜ、「的」が固有名詞の外来語語基と結び付くのか、またその派生語全体は如何なる意味特徴を有するのか、といったことに関しては後の第五節で論じたい。

次に、「的」の前接する外来語語基の意味特徴について、意味分野と語彙的意味の評価性という二つの側面から考察を行ってみたい。

（二）意味分野から

まず、『分類語彙表』の分類に基づき、今回の実例調査で得た 252 個の外来語語基の意味分野について調べた結果は次の表 3 になる。

[13] 例えば、外国原語では動詞と言われる語(「start」「diet」など)が日本語に取り入れられる場合、ひとまず名詞の語形(「スタート」「ダイエット」など)として借用され、その後活用のための日本語化の操作(「する」の付加など)が行われる。

[14] 山下(1999)29 頁を参照。当該調査のいわゆる固有名詞とは、地名以外のものをさしているが、本調査の場合は地名の外来語語基を除くにしてもまだ 30 例もあり、12%も占めている。

表 3　「的」の前接外来語語基の意味分野

意味分野番号	1.1	1.2	1.3(3.3も含む)	1.4	1.5(3.5も含む	合計
語数(%)	36(14%)	93(37%)	103(41%)	12(5%)	8(3%)	252(100%)

そして、それぞれおの項目に属される例を下にいくつか挙げよう。

「1.1 抽象的な関係」　「シンボル的」「フォーカス的」
「ミスマッチ的」「システム的」…

「1.2 人間活動の主体」　「アイドル的」「プロ的」
「スタッフ的」「レギュラー的」…

「1.3　人間活動」　「アニメ的」「ニュース的」「インフレ的」…

「1.4　生産物および用具」　「ラジオ的」「コーヒー的」
「ハイファイ的」「マスコット的」…

「1.5　自然物および自然現象」　「スペクタクル的」
「サド・マゾ的」「バブル的」…

「的」の前接する外来語語基が如何なる意味特徴を有するのかをより客観的に捉えるために、ここで、山下（1999）の、「～的」派生語の語基に関する意味分野分布の調査（%比率のみ）を下の表 4 で引用して比べてみよう。

表 4　山下（1999）「的」の前接語基の意味分野[15]

意味分野番号	1.1&3.1	1.2	1.3&3.3	1.4	1.5	その他
語数(%)	32.6%	14.1%	45.2%	2.6%	4.6%	0.9%

山下（1999）の調査結果表の中の「その他」とは固有名詞を指しており、『分類語彙表』（増補改訂版）の分類基準では、固有人名は 1.23 に、固有地名は 1.2590 に分類されているが、本稿では両者を含めた固有名詞を 1.2 に仕分けることにした。

表 3 と表 4 を比較してみると、具体的行為を表す「1.3　人間活動」に属される外来語語基の比率（41%）は、漢語語基のそれ（45.2%）

[15] 山下（1999）29 頁の表 5。

よりやや低くなってはいるものの、全体の約 4 割という高い比率を示している。「1.3　人間活動」に属される外来語語基の例には、例えば「アニメ的」「バレエ的」「ニュース的」「エピソード的」などがある。

本稿の調査結果では山下（1999）と異なる点として、まず、「1.1 抽象的な関係」に属される語基に関しては、外来語（14%）が従来の（32.6%）より大分少なく、半分以下であることが挙げられる。次に、1.1 の語基の減少とは反対に、「1.2　人間活動の主体」という、より具体的な概念を表す語基は、今回の調査での外来語（37%）が山下（1999）の従来の（14.1%）よりかなり増え、2.6 倍にもなる、ということも明らかになった[16]。また、「1.4　生産物および用具」という具体的なものを表す語基は全体においては少ないものの、外来語の比率（5%）が従来の（2.6%）のほぼ 2 倍にもなるのである[17]。

要するに、今回調査した「的」の前接する外来語語基の意味分野の分布から考えると、従来研究の中心となる漢語語基は抽象的な概念を表すのが多いのに対して、外来語語基は具体的な概念やものを表すのが多い、という特徴をつけることができた[18]。

ところで、なぜ「的」と結合する外来語語基は漢語語基と違って具体的な概念やものが多いのか、この興味深い語構成的な特徴に関しては、第五節で改めて論じたい。

（三）語彙的意味の評価性から

「的」に前接する外来語語基の意味特徴について、今度は語彙的意味の評価性という別の側面から分析してみることにしよう。

原（1986）では、語基の語彙的意味の評価性が接尾辞「的」との結合に関わりがあるとされ、例えば、

---

[16] 前述したが、山下（1999）では固有名詞は「その他」（0.9%）に振り分けられたが、たとえ今回の調査と同じく、それを 1.2 に入れるとしても、今回の外来語語基調査の半分にもまだ及ばない。

[17] 「1.5　自然物および自然現象」に属される外来語語基の例は今回の調査でも山下（1999）のより更に少ない故、それに関する記述は略すことにした。

[18] この、「的」の前接する外来語語基の意味特徴の調査結果は遠藤（1984）とは反対になっているが、山下（1999）と一致している。

「批判的ナ意見」　　*「批評的ナ意見」

のように、評価がプラス・マイナスはっきりしているもの(「批判」)が「的」と結合し、属性を表すように転じていくが、評価に関して中立的なもの(「批評」)は積極的に属性を表す用法に転じにくい、と述べられている[19]。

この論点が、「的」の前接外来語語基に当て嵌まるかどうかを検証するために、外来語語基の語彙的意味の評価性について調べてみた。その調査結果を意味用法別に示すと、次の表5になる。

表5　意味用法別における外来語語基の意味的評価性[20]

評価性 / 意味用法別	中立的	非中立的	
		プラス的	マイナス的
属性限定	46	22	26
比喩	18	52	11
属性限定・比喩	12	22	7
属性限定・比喩・属性評価	7	0	0
関連付け	1	5	0
属性評価	23	0	0

まず、[属性限定用法]に用いられる外来語語基の語彙的意味の評価性は、中立的な数が一番多く、プラス的なものとマイナス的なものを合わせた、非中立的な数と大体同じぐらいである。一方の[比喩用法]に使われる外来語語基は、プラス的なものが圧倒的に多い。つまり、「的」の前接外来語語基の意味の評価性からすると、[属性限定用法]に使われる外来語語基は特にこれといった偏りが見られないのに対し、[比喩用法]の「的」の前接語基として、プラス的なもののほうが好まれる、という傾向が捉えられる。これは、比喩の基準としてプラス的な語彙的意味の語が使われやすい、ということを

[19] 原(1986)78頁を参照。

[20] 表5の中に「属性限定・比喩」という項目があるが、これは、例えば「カルト」に「カルト的な人気」という[比喩用法]の例も、また「カルト的な映画」のような[属性限定用法]の例もあるように、二つの用法をもつ語基のことを指す。そして、「属性限定・比喩・属性評価」とは、例えば「テレビ」のように、「テレビ的に振る舞わない」([属性限定用法])、「テレビ的なもの」(「比喩用法」)、また「テレビ的には質が落ちても…」([属性評価用法])といった、三つの用法をもつ語基のことを指す。

物語っている。なお、表 5 の中の、比喩の用法を含む「属性限定・比喩」の場合は概ね[比喩用法]に近い傾向を見せている。

ここに用例をいくつか挙げよう。 [属性限定用法]に使われる、語彙的意味が中立的なの語基の例として「コミュニケーション的行為」「メディア的大変革」などが見られるが、[比喩用法]に用いられる、語彙的意味がプラス的な外来語語基の例には、例えば「エース的存在」「ウルトラマン的性格」「リーダー的な役割」などが挙げられる。

それから、[属性評価用法]に使われる外来語語基の語彙的意味の評価性を調べると、全て中立的なものだということが分かった。この用法をもつ「～的」派生語の後には主語 （話し手）の立場や見方といった評価内容が後述されるので、物事の評価基準として中立的な意味の語が来やすいわけであろう。具体的な例に、「スケジュール的に大変厳しい」「スコア的には満点です」「コスト的にかなわない」などが挙げられる。

原（1986）は評価がプラス・マイナスはっきりしているものが「的」と結合し、属性を表すように転じていくが、中立的なものは積極的に属性を表す用法に転じにくい、と前にも述べたが、本稿の考察では語彙的意味の評価性という観点から、[的]の前接外来語語基について調べると、「～的」派生語の意味用法ごとに特徴が見られた。即ち、[属性限定用法]に現れる外来語語基にはこれといった偏りが見られないのである。それに対し、[比喩用法]の外来語語基としてプラス的なものが来やすいという傾向が捉えられる。一方、 [属性評価用法]に用いられる外来語語基には中立的な語が来やすい、と解明できた[21]。

五、[外来語＋的]派生語の特徴

第四節の、接尾辞「的」の前接する外来語語基の語構成的な性質に関する考察を通して、新生の[外来語+的]派生語と従来の[漢語＋

[21] 原（1986）では、[属性評価用法]を表す漢語語基には如何なる評価性の語が来やすいのか、という問題は言及されていない。

的]派生語との相違点として、まず、「的」の前接外来語語基には固有名詞が少なくないこと、そして、具体的な概念やものを表すものが多いこと、という二つの特徴を明らかにできた。本節では、なぜ[外来語＋的]派生語にこのような特徴があるのかについて考えてみたい。

固有名詞というのは、それ自身が具体的なもの、例えば固有人名の場合は具体的な人間そのものであり、固有地名も具体的にそのところを指す。これらは確かに具象性をもつ一方、大体において、それなりの顕著な、即ち、一般的によく知られる、抽象的な性質を有することが特徴的だと考えられる。例えば、「ハリウッド」という語は「世界的な映画の都として知られる」、言わば、「世界的な映画のシンボル」という抽象的な特質がある。「ウルトラマン」も、アニメの主人公であるが、「地球を守るために、宇宙から来て怪獣たちとたたかう」[22]、即ち「強くて正義感を持ち、人を守る」というイメージ、抽象的な特質をもつものである。こういった、顕著な抽象的特質を有する固有名詞が接尾辞「的」と結合する際に、その抽象的な特質が引き出され、一つの属性として引き立てられるようになると思われる。言わば、具体的な固有名詞から抽象的な特質が抽出され、即ち抽象化されるのである。この抽象化というのは、物事の特質を概略化することとも考えられる。

つまり、具象性をもつ人名や地名の外来語語基は、接尾辞「的」の後続によって、その外来語語基のもつ抽象的な特質が引き立てられた結果、具象的な外来語語基が抽象化され、即ち、概略化されるようになり、そして、

「大衆迎合のハリウッド的作品なのか」（朝日 2001.5.28）

「『ウルトラマン的性格』の人がいる。」（朝日 2001.2.10）

といった例の如く、後に来る語に対し、比喩や限定・修飾するものとして働くのである。これが、[外来語+的]派生語に、固有名詞また

[22] 「ハリウッド」と「ウルトラマン」の意味解釈は『三省堂　スーパー大辞林 3.0』による。

は具体的な概念やものを表す外来語語基と「的」により結合される[比喩用法]の例が多い所以であろう。

「概略化」というのは、一種の「あいまい化」とも考えられる。即ち、物事の表す属性の範囲を広げたり、内容をぼやかしたりする「概略化」は、断定を避けたりする効果ももたらされるようになり、これこそ「あいまい化」に繋がる。

現代日本人は、物事をはっきりと言わず、その意味を文脈にまかせたり相手の推察に期待したりする、というユーフェミズム志向のコミュニケーションの傾向がある、と言われている[23]。これに当たる接尾辞の表現も少なからず、例えば「皮肉っぽい言い方」の「～ぽい」や、「外国人風の男」の「同定推定のあいまい化用法」を表す「～風」などが挙げられる[24]。本稿で取り上げた「的」も、そのあいまい化表現の接尾辞の一つだと言えよう。

他に例を挙げると、例えば、

「品質が良くてしかも安いユニクロ的事業を目指している」(朝日 2001．8.3)

「第 2 楽章の天上的な装飾音型や、フィナーレのウィーン的なリズムの揺れなど、…」(朝日 2001．5.23)

も、「ユニクロ」の「品質が良くて安い」といった、よく知られる抽象的な特質、また「ウィーン」の音楽のシンボルとしての名高い特性なども「的」との結合により抽出され、言わば、抽象化・概略化される。そして、それぞれ比喩、または属性限定の機能を果たすようになる、と理解できよう。

固有名詞のみならず、「的」の前接する、具体的な概念やものを表す普通名詞の外来語語基も、同じようなことが言える。例えば「コンビニ的な均質で透明な場所」という例の如く、「コンビニ」という具体的場所や概念などを表す外来語が接尾辞「的」と結合するに当

[23] 前出の注 11 を参照。
[24] 接尾辞「～ぽい」と「～風」のあいまい化に関する論述はそれぞれタチアナ（2003）と林（2008）を参照されたい。

たり、そのよく知られる、(例えば文中の「均質」「透明」などの)特質が抽出される。つまり、具象的な外来語語基は、抽象的な属性の引き立てにより抽象化・概略化されるプロセスを経て、あいまい化効果を帯びながら、後続語を比喩、または修飾・限定するようになるわけであろう。他に、「インデックス的な情報」「ドキュメンタリー的手法」「カタログ的な情報誌」なども、抽象化・概略化のプロセスを経た、具体的な概念を表す外来語語基と「的」が結合した派生語の例である。

一方、今回の調査で「1.1　抽象的な関係」に属される外来語語基が14%の比率を有するが、これらは、最初から抽象的な概念を表す故、前述した具体的な概念やものを抽象化するようなプロセスは勿論不要であり、直接接尾辞「的」と結び付き、そもそも有する抽象的な概念をもって後続語を修飾、限定したり、表現内容をあいまい化したりするわけである。これは、従来の、抽象的な概念を表すものが多い漢語語基と「的」が結合する、[漢語＋的]派生語と同じ本質をもつ派生語だと見られよう。例として、「エリート的処遇」「ユートピア的に賛美する」「エコロジー的近代化」などが挙げられる。王(2000)には、「的」と結合する外来語語基が実体概念を表す名詞に限られると述べてあるが、本稿の実例調査を通して、実体概念以外に抽象的な概念を表すものもあると明らかになった。なお、「的」と結合する外来語語基がなぜ実体概念を表すという特徴をもつのか、といったことに関しても王(2000)では論述されていない[25]。

要するに、[外来語＋的]派生語は、その多くの外来語語基が具体的な概念やものを表すが、「的」との結合によってその有する抽象的な特質が抽出され、即ち、属性の引き立てによる抽象化・概略化されるプロセスを経て、表現内容がぼやかされ、あいまい化された、婉曲な表現効果が帯びるようになると特徴付けられよう。

従来、接尾辞「的」が抽象度の高い漢語と結び付きやすいと言われるが、本調査においては、「的」は抽象的な語基のみならず、具象

[25] 王(2000) 55頁。

性をもつ外来語ともかなり盛んに結合すると見られた。ただ、この場合は、外来語語基の具象性を抽象化させるというプロセスが必要である、と本稿の考察を通して明らかにできた。

ちなみに、第三節では、[外来語＋的]派生語に[属性評価用法]が定着しつつあると述べたが、このいわゆる新用法の[属性評価用法]は主語（話し手）の自分の意見や考えを断定するのを避けたり、伝えようとする内容をあいまい化したりする用法である[26]。これも、現代日本人のコミュニケーション上のユーフェミズム志向の性格が、婉曲な表現特徴をもつ[属性評価用法]を表す[外来語＋的]派生語の生産性を助長し、現代日本語の言語生活に定着させつつある表れの一つだと言えよう。

六、おわりに

本稿では、従来あまり論究されなかった、外来語語基と漢語系接尾辞「的」が結合する派生語を中心に考察を行ってきた。

まず、今回収集した[外来語＋的]派生語実例の意味用法を分析し、「的」を含む派生語の、従来用法と新用法を併せて再検討した。結果として、[外来語＋的]派生語は従来の[漢語＋的]と同じく、主に[属性限定用法]と[比喩用法]に集中しているものの、いわゆる新用法の[属性評価用法]も確かに定着しつつある傾向が確認できた。また、もう一つの新しい用法[主体用法]は[外来語＋的]派生語には存在していないことも明らかになった。なお、[属性限定用法]と[比喩用法]の関連性、また、[関連付け用法]と[属性評価用法]との連続性なども論及した。

それから、「的」と結合する外来語語基の語構成的な性質について、品詞性と意味分野、語彙的意味の評価性という三つの観点から考察した。従来の漢語語基と同じく、「的」の前接する外来語語基もやはり名詞が殆どではあるが、漢語語基と違って、固有名詞が少なくないのが特徴的である。なお、漢語語彙は抽象的な概念を表すの

[26] 金澤（2005）を参照。

が多いのに対し、外来語語基は具象的なものや概念を表すのが多い、ということも、従来の漢語語基との相違点だ、とわかった。それから、「的」の前接する外来語語基の語彙的意味の評価性と「～的」派生語の意味用法との関わりも論述した。

なぜ「的」の前接外来語語基は固有名詞が少なくなく、また、具体的な概念やものを表すものが多いのかという特徴に関しては、日本人の表現のし方と関わりがある、と分析をしてみた。固有名詞や具体的な概念、ものを表す外来語語基は、「的」と結合することにより、そのよく知られる特徴・属性が抽出される、即ち、抽象化・概略化というプロセスを経て、表現内容をぼやかしたりあいまい化したりしながら、後続語を比喩、または修飾・限定、評価するようになるわけであろう。要するに、この [外来語＋的]派生語の特徴の背後に、現代日本人のユーフェミズム志向のコミュニケーションのし方が働いている、と明らかにできた。

上述した通り、本稿の考察を通して、従来の抽象的な概念を表す漢語語基と結合する場合に比べ、接尾辞「的」が具象性をもつ外来語語基と結合する場合は、更に抽象化・概略化というプロセスが必要とされる、ということを解明したが、それから考えるに、「～的」派生語の本質は抽象的・概略的な性格にあると言えるのではなかろうか。

参考文献

遠藤織枝（1984）「接尾語「的」の意味と用法」『日本語教育』53、日本語教育学会

王淑琴（2000）「接尾辞『的』の意味と『的』が付く語基との関係について―名詞修飾の場合―」『日本語教育』104

王淑琴（2005）「接尾辞『―的』の語基に課される意味的制約」『東吳日語教育學報』28

金澤裕之（2005）「『～的』の新用法について」『日本語科学』17）

ケキゼタチアナ（2003）「『ぽい』の意味分析」『日本語教育』118

陣内正敬（2003）「外来語の課題と将来像」『日本語学』22-8、明治書院
原由起子（1986）「特集・接辞 ―的―中国語との比較から―」『日本語学』5－3、明治書院
山下喜代（1999）「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育　森田良行教授古稀記念論文集』、明治書院
林慧君（2008）「日本語・中国語の同形字音形態素『～風』の意味―認知意味論による対照分析―」『台大日本語文研究』16

辞書・資料

『朝日新聞記事データベース』（CD-HIASK）2001 年
国立国語研究所編（2004）『分類語彙表 増補改訂版』大日本図書

【注記】本稿は「日中文化交流広領域研究―歴史・文学・言語の多元的視野国際シンポジウム」（2010 年 10 月 7 日、於長崎大学）における口頭発表の内容に加筆修正を施し、まとめ直したものである。